

# 道連ニュース

2017年12月号 No.137

北海道生活協同組合連合会

〒003-0803 札幌市白石区菊水3条4丁目1-3

全労済北海道会館内

TEL 011-841-8601 FAX 011-841-8605

URL: <http://www.doren.coop>

## 11.10~11 さいたまユースサポートネット視察

さいたまユースサポートネットはさいたま市で「高校中退、通信制高校、不登校やひきこもりを経験、障がいを感じづらさを感じている子ども・若者などこの社会に居場所がなかなか見つからない子ども・若者たちを無償で応援するNPOです。」

NPOはさいたま市の独自事業として若者自立支援ルーム事業1か所と生活困窮者学習支援事業を、厚労省からの地域若者サポートステーション事業を受託し、NPO独自では「たまり場（交流と学び直し）」事業を行っています。学習支援教室は11か所で運営、保護世帯200人一人世帯150人の中高生述べ15000人が利用、学習ボランティア登録者350人と、1市では日本で最大の事業を担っています。

今回は、子どもの貧困問題に関し学習支援教室、若者自立支援事業、たまり場事業を通じて地域連携・支援の課題を把握することを目的に視察を行いました。

若者自立支援ルームは200名超の登録があり、市の福祉窓口からの紹介が中心で、困難＝ひきこもりや障がい、不登校、貧困などのリスクをかかえ、居場所のない子ども・若者のための常設の「居場所」として自立＝就学・就労を目標にプログラムを行っています。但し、NPOが受託する「働きたいけど働けない」人を対象とした地域若者サポートステーションでの支援以前のコミュニケーションや生活状況、学力の問題が

大きく、自立支援ルームの役割は大きいと説明があり実際の対象となる方のお話を聞くにつけ、その必要性を率直に感じました。2日目NPO独自の「たまり場」を視察しました。交流の部屋は、お菓子や遊び道具が用意され学生ボランティアが司会で最初、今週うれしかったこと、ミスったこと、クリスマス会で食べたいものの意見交換では、各自が発表する形式で、意見を言える子どもと遠慮する子ども、部屋に入れない子どももいて、めんどろみる子ども、部屋の出入りを繰り返す子どもなど、コミュニケーションを通じた信頼関係を築くことを主眼に、一切強制や命令はなく、進められていました。その中で、子どもが安心して話せるよう、また、話の中からスタッフや代表が子ども1人1人の状況や問題を気づき、解決にむけたコミュニケーションを保護者や行政の相談窓口含め行っているとのことでした。「学び直しの場」では不登校や意欲をなくして高校に行けなかった子どもへの学び支援を学生や社会人ボランティアがおこなっていました。学習支援を必要としている子どもたちの現状を知るにつけ学習支援にたどり着くまでの背景の問題も含め受け止め、困難な子どもたちをなんとか助けたいという情熱と支え手の協力体制、そのための信頼形成と地域コミュニティづくりの視察は貴重な体験であった。

## 11.2 北海道地域灯油意見交換会

直近の報道で灯油が前年より20円近く値上がりすることの明確な説明を求めました。国際情勢の関係で原油相場が上がり、円相場の変動との理由だが、この間、50%シェアを誇るJXTGの四半期業績で利益がでており、円相場も先月対比で大きな変動もなく精製所の整理等で生産性もあがっていることから、利益の還元という立場からも、単純な卸価格の市場連動はいかなものか、経産局は卸価格の監視や急激な変動への対応としての備蓄分の放出などの施策を講じるべきだと述べました。コープさっぽろは20円近い値上げで福祉灯油についても、対応がされるべき。過去の自治体要請の中で80円以上の価格になった場合、福祉灯油の実施再開という自治体もあり、SS過疎地の問題も積極的に道がリードをすることの点も含め北海

道は指導勧告をと求めました。

元売りの見解は、国際情勢の関係で原油相場が上がり、円相場の変動での要因で、小売価格については関与していない。今後の見通しはマクロで価格は落ち着くと思われる。見通しは原油50ドル台だが減産協調の流れが強まり11月末のオバック総会での結果にもよる。あくまで卸価格の市場連動に伴う理由を述べるにとどまった。今後、卸価格の値上げ要素の流れは強まっており、小売価格は限りなく100円に近い価格が予測されます。経産局は公共料金ではないので、行政からの関与はしないと回答。冬の北海道にとっては必需品である灯油価格の動向を更に監視していく必要があります。

# 生活くらぶ わくわくまつり

10月29日(日)札幌コンベンションセンターにて「わくわくまつり」を開催しました。今年は、台風などで天候が安定しませんでしたでしたが、当日は晴れて来場者を迎えることができました。1984年から始まった生活クラブのまつりも今年で34回目。ステージではまず札幌ジュニアジャズスクールによる演奏で始まり、大麻高校によるチアリーディング、今年からテレビ放映も始まったご当地ヒーロー双龍ドラゴンのショーなど子どもから大人まで楽しんでいただき終始大盛り上がりでした。約半年をかけて企画・準備をすすめた組合員と生産者のコラボ模擬店も海鮮塩焼きそばやロコモコ丼にぶっかけうどんなど、9ブースともに大人気でした。道内の生産者の会「共生会」が組合員と一緒に作ったいなり寿司のブースもなんと1000個以上を売り上げました。また、模擬店だけでなく、普段使用している消費材を生産者と販売しながら語りました。各ブースとも趣向を凝らし、揚げたてコロケやカレー



うどんの試食をしてもらいながら語るなど、様々な方法で消費材をアピールしました。こちらでも大盛況で行列ができ、たくさんの人が

集まりました。

あそびコーナーはさかな釣りやヨーヨーつり、ペットボトルボーリング、木の砂場など小さなお子さん達で大賑わいでした。特にバルーンアートは大行列で大変な賑わいとなりました。今年はパパの参加も多く、育児に参加する父親が増えていることを実感しました。



生活クラブが行っている運動をアピールする「くるとわかるコーナー」でも豚肉の試食会や手作りシロップのかき氷、瓶キャップで石けん作り、子ども向けのぬりえやクイズ、木を使ったアクセサリ作りにRピンでの輪投げなど楽しく遊んでためになる盛りだくさんのコーナーとなりました。

3000人近い来場となり、組合員・組合員外ともにたくさんの人に生活クラブをアピールすることができました。

まつり開催にはたくさんの人の手がかかり、開催後は感謝でいっぱいでした。「つくる手 食べる手 その手はひとつ」というスローガンは生活クラブそのものを表す生活クラブにしかできないものです。スローガンの通り、たくさんの人が手を取り合いまさにひとつになったまつりになりました。

## 平成29年度 行政・生協連絡会議報告

2017年10月31日(火)今年度の北海道東北地方行政生協連絡会が開催されました。

①会場は岩手県立県民生活センター 大ホール ②参加者は厚生労働省1名(金子室長補佐)、岩手県5名(県民生活センター職員含む)、他道県6名、生協7道県連14名、日本生協連1名、地連3名、合計30名で行われました。はじめに主催者の岩手県(環境生活部・津軽石部長)と岩手県生協連から挨拶がありました。続いて厚生労働省の金子室長補佐から、『生協が行う地域福祉の先駆的な取り組み事例に触れながら、高齢者だけでなく児童や障害者なども含めた包括的な地域支援体制づくり(『我が事・丸ごと地域共生社会』)を目指す上で生協の協力が欠かせないこと、支え合い・助け合いの組織である生協が地域になくしてはならない存在になることを期待するという挨拶と報告をいただき、次に日本生協連伊藤渉外広報本部長から「全国の生協の社会的取り組み」の内容も含めて挨拶と報告がおこなわれました。基調報告は、『消費者市民ネットとうほくの今後の活動の展望と行政との連携』について。「消費者市民ネットとうほく」の吉岡理事長より、設立の経緯や活動内容、適格消費者団体の性格や権限

(消費者に代わり、事業者への申し入れや訴訟をおこなう)について、いくつかの差止め事例なども挙げながら報告頂きました。質疑応答では、来年の民法改正に関わる問題や、生協として消費者市民ネットとうほくの活動をどのように支えていくべきか等の質問がありました。次に、参加行政・生協からの報告が行われ、最後に次年度の開催県となる宮城県より挨拶がありました。会議終了後に、ホテルルイズにて懇親会を開催。行政担当者(青森県1名、岩手県4名、宮城県1名、山形県1名、福島県1名)も含め計27名が参加し、交流を深めて有意義な会議となりました。

